

委員会県外視察レポート

総務文教常任委員会

1. 調査目的

岩手県紫波町では、民間の力を活用し、不動産開発に取り組んだ同町の手法を学ぶべく、第三セクター方式により設立されたオガール紫波株式会社を訪問し、具体的手法について調査した。

秋田県五城目町では、コミュニティバスの試験運行を始めたほか、廃校となった小学校校舎を改修して活用し、起業・移住施策に取り組んでいる。同町での地域公共交通の制度設計や課題と併せ、若者の移住・交流や起業支援策について調査した。

2. 調査地

岩手県紫波町 オガール紫波株式会社、オガールプラザ
秋田県五城目町 五城

目町役場、五城目町地域活性化支援センター

3. 調査実施日

平成30年11月13日(火)～15日(木)

4. 調査の経過

(1) 岩手県紫波町に

おける公民連携によるまちづくり

①紫波町の概要

岩手県中部に位置し、昭和30年に一町八村が合併して誕生した。今回視察施設のある中心部に人口の6割が集中しており、盛岡市と花巻市はともに通勤圏、平成30年3月現在の人口は33,170人で

ある。

今回視察の「オガールプロジェクト」に

より整備されたエリアでは、休眠していた駅前前の町有地10・7ヘクタールを舞台に、公民連携の手法で公共施設並びに民間施設立地による複合開発が行われ、事業開始10年を経て、年間100万人が訪れるエリアになるうとしていく。

②オガールプロジェクトとは

平成19年、塩漬けとなった土地を活用するために、前町長の発案により、公民連携によるまちづくりがスタートし、町民や民間企業の意見を取り入れた「紫波町公民連携基本計画」が策定され、平成21年3月に議会議決された。この基本計画に基づき平成21年度から始まった駅前都市整備事業が「オガールプ

ロジェクト」である。

今回の視察先、オガール紫波株式会社は、

官と民が連携するためのエージェントの役割を担っている。

③エリア内施設と概要

・岩手県フットボールセンター
・オガールプラザ 平成24年6月オープン
の官民複合施設 地域材使用
図書館、地域交流センター、産直紫波マルシェ、子育て応援センター、歯科医院、眼科、飲食店、学習塾、貸しスタジオ等

・エネルギーステーション 平成26年7月熱給開始
木質バイオマスボイラー使用

・オガールベース 平成26年7月オープン
の民間複合施設 地域材使用

ビジネスホテル、パ



紫波町「オガールプラザ」

レーボール専用体育館、コンビニ、飲食店、事務所
 ・紫波町役場 平成27年5月開庁 3階（一部4階）建て、町産材使用
 ・オガールセンター 平成28年12月オープン
 の官民複合施設
 教育サポート施設
 他小児科、病児保育、アウトドアショップ、ペーカリー、スポーツジム、美容室等
 ・オガール保育園 平成29年4月開園 民設
 民営定員150名 地域材使用
 ・オガール広場、大通公園 平成24年8月～26年7月完成
 建物のアーケードにより建物と広場が一体となった空間を創出
 ・オガールタウン 平成25年10月分譲開始 全57戸
 ・オガールエリア従業員数 257名（役場職員除く）



五城目町「地域活性化支援センター」

職員除く）
 ④公民連携の基本計画をベースとしたオガールプロジェクト
 構想段階から市民参加を前提とした「紫波町公民連携基本計画」では、不動産価値の向上からの町づくりを志向し、町民の資産である町有地を最小限の財政負担で、公共施設整備と民間施設等の立地による経済開発を行うと定められている。

その特徴の一つは、町所有の土地に、事業用定期借地権を設定し、民間の投資を誘導して経済の開発に繋げている点である。
 デザインは、ガイドラインを策定し、その運用方針等を検討する

有識者会議が設けられたほか、紫波町が目指す循環型の町づくりの具現化に向けてより多くの木質系材料が活用されている。
 プロジェクトでは、資産保有の特別目的会社であるオガールプラザ(株)が、誘致と調査を先行させ、入居するテナントが決まった状態で設計規模や建設費用を算出するなど、着工からオープンに至るまで入居率100%を実現させ、かつ補助金のみ頼らない事業方式となっており、金融機関からもそのキャッシュフローは高い評価を得ている。
 ⑤オガールプロジェクトがもたらした主な効果
 ・不動産価値の向上と周辺地域への民間投資と再投資を誘発
 ・地元企業や企業体による施工で、資金の地

産地消
 ・まちづくりの拠点化による人と人の繋がりを深化と醸成
 ・統括的産直「紫波マールシェ」の経営貢献と既存の町内産直への波及効果
 ・交流人口、定住人口の増加による歳入増の効果
 (2) 秋田県五城目町におけるコミュニティバス運行開始に関して
 ①五城目町の概要
 秋田市の北方、大潟村の東部に位置する人口約9千人の農業と林業の農山村。昭和30年に五城目町他4村が合併して誕生。中心の商業エリアから東に行くにつれ中山間部となっている。

②従来の地域公共交通体系と課題
 五城目町では、路線バスの廃止に伴い、現在北部と東部合わせて4エリア4路線（中心部から最遠の折り返し点まで最大25分程度）でデマンド型乗合タクシーを1日5便運行。ダイヤの時間までなら当日予約可能で、登録した自宅前から乗車し、五城目エリアの町中では拠点毎に乗降場が設けられている。
 料金は距離に応じて、300円から600円、1便当たり平均3～4名の実績。各々四つのエリアから中心部の五城目エリアに来る時には利用できるが、五城目エリア内での移動ができないという課題を有していた。
 この他、過去近隣の1町2村の公共交通の共同運行も話し合われたが、民間路線や対象とする住民の調整が難しく、現在まで実現していない。
 ③巡回コミュニティバス運行開始について

五城目エリア内移動の課題解決のため、平成30年10月1日より、ボンネットバス「きやどっこ号」によるコミュニティバスの試験運行を開始した。町行事開催日を除き、日曜、祝日、年始と第二・第四土曜日は運行がない。五城目エリアのバス停を一周約30分の1日5便でカバーしている。車両は定員21人、料金は1日乗り放題で300円（小学生半額）である。当初の見込みより利用が少なく、早速11月12日より、第三便と第五便を逆回りに変更している。

(3) 秋田県五城目町の移住・交流施策と起業支援策

① 起業支援の経緯
人口減少が進んでいた五城目町では、雇用対策を以て人口減少に歯止めをかけるべ

く、平成23年、専任の企業誘致担当者を任命し、誘致活動を始める中で、対応方策について他自治体とは違った方法で進める必要性を認識していた。

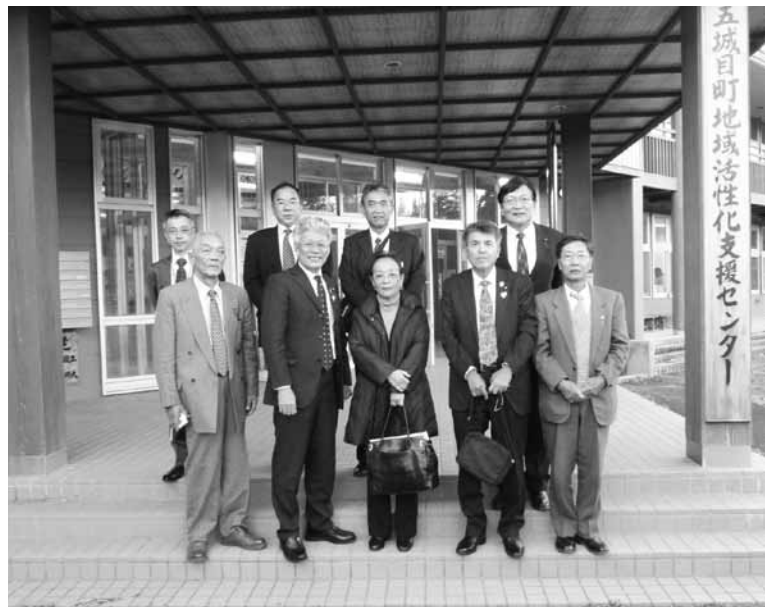
折しも、馬場目小学校が、平成25年に廃校となることが決まった。町では検討委員会を設置して活用方針を協議した結果、企業誘致の場として活用することになり、後述の「五城目町地域活性化支援センター」が誕生した。担当者は町内外企業を訪問、姉妹都市である東京都千代田区のシェアオフィスにも参加し、人脈を大切にしながらベンチャー企業や若手経営者に誘致を働きかけた。平成25年の移住3人、雇用5名の実績を皮切りに、平成28年以降、12件の起業がある。

② 五城目町地域活性化

化支援センターの拠点化と効果
平成25年10月に、開

所。旧教室をレンタルオフィスとして誘致企業やコミュニティ活動を行う事業者に貸し出して、活動や起業を支援している。平成25年以降11事業者が入居し、単なる仕事場としてだけでなく、お互い交流したり、刺激し合ったりする場として利用されるほか、一般にも勉強会やイベント、地域交流の場として開かれている。事業者のうち8社が法人登記を行い、16名の雇用を創出した。この他、地域おこし協力隊の拠点ともなっている。

入居企業に対して他に町独自の補助金支出はない。入居費用は1室当たり月2万円で暖房を除く光熱費は実費となっている。



5. 調査の結果、意見

(1) 岩手県紫波町

オガールプロジェクト
紫波町では先行取得したものの、塩漬けとなってしまうた町有地を再度整備のテーブルにのせないといけない、という事業的な必然性があったとはいえず、経営的目線を有し、プロジェクトを動かせる

人材が育っていたことが大きな要因と言える。住民や起業家のニーズと民間の提案力を有効に組み合わせ、最大限の効果を低リスクで、今のところ事業運営が行われている。

ちなみにプロジェクトが始まった平成19年における紫波町の実質公債費比率は23.3%

であった。

同じような開発適地が日高川町内にある訳ではなく、その意味ではそのまま取り入れるのは難しいが、小規模な自治体であっても、手法として民間と上手く連携することで町有地を用いて複合開発を行うことができるという点で大変興味深いものがあった。

当町においても、利用予定のない町有地や建物が点在しており、その有効利用に民間活力の導入が検討されているが、紫波町のようなコンセプトと事業方式を参考とすれば、貸しオフィス等による若者の起業支援や若者の定住促進・支援に向けて、事業化の検討が可能と考えられる。

(2) 秋田県五城目町
にみる地域公共交通
五城目町の人口は日高

川町とほぼ同じであるが、面積は当町をぎゅつと圧縮したようなイメージである。そのせいか現行4路線の乗合タクシーに要するコストも比較のうえでは当町より低くなっている。五城目エリアでの移動手段の課題は、住民の行政需要であり、行政として課題解決を図るとともに、試験運行を始め一カ月の運行実績をもとに、ダイヤ変更に対応するあたりは、利用者本位の行政サービスだと感心した。

次に、五城目エリアのコミュニティバス周回コースであるが、単一路線に巡回路線を組み合わせるという点で興味深かった。経済活動を地産地消に、医療や健康管理を始めとした行政需要を自己完結に近づけるためには、川辺・中津地区で

は「巡回」的な要素の組み込みや更なる充実も必要なのではと考えさせられた。また、五城目町のデマンド型乗合タクシーの乗降場所や予約に対する対応は利用者本位で運用されていると考える。

日高川町においても、単一方式にこだわらない、各々の地域にマッチした地域公共交通が、共同運行も含めた運行形態や方式、担い手、行政の関与度と費用負担などの研究・議論を経て再編整備されていくことに期待したい。

(3) 秋田県五城目町の移住・交流施策と起業支援策
専任担当者の話によると、首都圏からの起業・移住により、「都会的な田舎を目指すのがモットー」、とのこと。そして、「若者が挑戦しやすい環境が

出来た」と感じているそうである。これだけ若者をひきつける起業支援や、移住・交流で実績を上げているのは、持続可能なまちづくりを進める上でターゲットを大きな企業ではなく、若者やベンチャー企業としたこと。そして「人」と「縁」を大切にして繋がりを広げて行く仕組みと、地域活性化支援センターの存在というソフト・ハード両面の受け皿があったからこそである。大阪経済圏からの交通アクセスや立地条

1. 調査目的
地産地消推進計画と6次産業化チャレンジ支援事業についての実施状況
ねんりんピック富山2018【総合開会式

産建厚生常任委員会

件、更にはこれまでの移住・交流の実績を見た場合、決して当町も遜色はない。

しかしながらまだまだ有効活用できる普通財産等の資源も随所に見受けられる当町として、持続可能な町づくりに向けてターゲットを絞り、若者にとって魅力的で、集えて、挑戦できる環境整備に移民政策の再考を期待するものである。「人と人との縁作り」をベースにした制度設計もぜひ参考にしてもらいたい。

2. 調査地
石川県白山市
富山県富山市・高岡市
及びグラウンド・ゴルフ交流大会

3. 調査実施日
平成30年11月2日(金)
4日(日)

4. 調査の経過と意見

(1) 白山市役所
平成17年2月1日、1市2町5村の合併により誕生した白山市は、人口が約11万3千人と金沢市に次ぐ第2の都市である。市の総面積は、石川県全域の18パーセントを占め、森林が地域の大部分を占めている。

白山市では、市独自で食育・地産地消を専任する地産地消課を平成21年4月に県内で初めて設立し、「生産者と消費者とを結びつける地産地消の推進」と「健全な食生活を実践



白山市役所内

する食育の推進」に取り組んでいる。

「白山を食べる」ということをメインテーマとし、関係機関が協力しながら、持続可能な地産地消の仕組みづくりを推進するとともに、地域の活性化につなげていくことを目指し、平成22年7月に地産地消推進計画（第1次）が策定された。

この計画の施策の柱として、「はぐくむ（生産）」、「つなぐ（流通）」、「いただく（消費）」の3つを掲げ、安全・安心な地元農林水産物の生産及び流通の拡大、そして学校給食、飲食店などにおける地元産食材の一層の消費拡大を図ることとしている。

主な取り組みとして、地元農林水産物のブランド認証を図るとともに、地元産品の調理方法の提案をはじめ、旬

の食材を食べることによる市民の健康づくりを図っている。特に食育活動の推進では、子どもが主役の料理教室を開催し、食に関わる体験を通じ人間性の育成を図ることを目的としており、成果として、低学年児童は、苦

手な野菜を食べる姿や残さず感謝して食べる姿が増えたということであった。身体に良いものを選ぶとする姿、地元の産業振興と教育を一体のものとして取り組んでいる市政は、地産地消推進計画が大きな役割を果たしていると感じた。

6次産業化チャレンジ支援事業では、国や県の6次産業化の支援制度に加え、白山市の農林水産物を原材料として使用した商品の開発を行う事業と、白山ブランドとしての認知度の向上を図るための

販路拡大に取り組み2つの事業へ支援している。

実績として、平成28年度2商品、平成29年度4商品が支援を活用しており、今年度は、2商品の支援が決定している。

当町においても、商業者との連携を深め、町ならではの商品開発

の推進と販路拡大に向け、更なる努力が必要である。

(2) ねりんピック 富山2018
【富山市・総合開会式】

富山市内にある県立総合運動公園陸上競技場では、総合開会式が行われた。



富山市「総合開会式」

会場内スタッフは、帽子と服がそれぞれ色分けされていて、その色によって役割分担が決められており、また会場内への入場の際に、競技者、スタッフ、視察団など全員が色分けされた名札を着用することで、無駄なくきちんと入場させるなど随所で工夫が見られた。

【高岡市・ゴルフ交流大会】
当町で来年実施されるグラウンド・ゴルフの会場地である高岡市の高岡西部総合運動公園を視察した。

大会会場は野球場と併設した全面芝生のグラウンドで、こちらも総合開会式と同様、それぞれ役割により色分けされたスタッフが常駐し、参加競技者や一般観覧者の対応をしていた。

会場内には選手テント以外に、健康づくり

教室、富山県のお土産や特産品、競技用品の販売などもあり、地元開催地のふるまいイベントでは、高岡市特産品である魚のつみれ汁400食が用意されていた。

視察した当日はあいにく曇りであったが、当町での開催時、雨天のことを考えると、選手団の雨天対策が必要になってくると感じた。

また、スタッフの皆さんが来場者からの問いかけにも笑顔で対応していること、会場内にはゴミ一つ落ちていないことは、やはり全国から競技者、見学者を出迎えるおもてなしの精神が随所で活かされていると思う。来年、本町で開催される際にも、地元産品をピーアールするとともに、真心を込めたおもてなしが必要だ。

平成29年度 歳入歳出決算認定審査報告



伊奈慎胤委員長

「平成29年度歳入歳出決算」の認定審査については、第3回定例会において設置された議長、監査委員を除く議員10人による決算特別委員会に付託され、町長、副町長、教育長、会計管理者、総務課長をはじめ、各担当課の課長、副課長、直接業務を担当している職員の出席を求め、慎重な審査を行いました。

審査は、去る10月19日に一般会計のうち、歳出の議会費から消費税までを、10月24日には教育費から歳入、そして10会計ある特別会

計全てについて、延べ2日間にわたり慎重な審査を行いました。審査は、「款」ごとに行い、委員からの質問に対し、担当する課が説明をする手法で進め、一般会計、特別会計共に、熱心な質疑応答がありました。

真摯に対応されました町長、副町長、教育長、担当課長はじめ、課員の皆さんに敬意を表します。

審査意見として記述しています5項目については、次年度以降も引き続き努力し、また改善すべき点は適正に改善され、行政効果を高めるべく、各部署において一層研鑽されることをお願いいたします。

さて、2年目となる久留米町政は、産業の振興・人口維持・子育て支援・防災対策・行政改革等、の目標に向かって邁進されておられます。それらの実現に向けて、今後も適切な予算執行をされま

す。審査の中で、国民健康保険事業特別会計、後期高齢者医療特別会計、介護保険事業特別会計の3つの特別会計の決算認定に際しては反対の意見もありましたが、採決の結果、起立多数により、認定することに決定いたしました。

審査意見

1. 災害復旧に関して、受益者負担の明瞭化等の課題を認めつつも、今後も必要に応じ増高等による負担軽減の他、初動・査定体制の充実につとめられた

い。

2. 歳入のうち固定資産税について、昨年より不納欠損額が増加している。また、住宅使用料のうち滞納繰越に係る収納額が前年より少なくなっているなど使用料及び手数料としては収入未済額が改善されていない。負担の公平性を図る上からも、引き続き徴収努力に努められたい。

3. 予備費について、施設整備等に充用され、ほぼ全額が執行されている実態が認められた。「予備費」としての、本来の予算科目が持つ意味に鑑み、早期な対応が必要な案件としても、今後は予算の審議や議会側への説明を行うなどして、安易な充用は謹んでいただきたい。

4. 財産管理費のうち、借地料に関しては前年と同額と言うこと

で、必要性等の見直しが進んでいるのか、という疑問を感じる。監査委員の意見にもあるように、精査の実施を強く望むものである。

5. 公有財産管理基金残高に関して、創設当初の積み立て残高目標レベルに達した感も



「谷深い山々の恵みが休むことなく流れ続ける日高川。その川を町の名とした新しい町。3つの町と村の生き方を大切にしながらの町づくりは、人々の知恵を集めてこそできるもの。未来を見通す視点が求められます。」

これは、「議会だより」第1号の編集後記によせた、出だしの一文です。

あれから13年、ばらばらだった旧町村ごとの意

あるが、近々の実需に即したとしても、まだまだ足りていない。使用されていない建物の撤去をはじめ、公有財産の維持・管理に向け、管理計画に基づいた基金の積み立て計画を策定すべきと考える。

識の和も高まり、ひとつの町としての形が完成しつつあります。

しかし、慮すべきは、人口減少と高齢化。毎年150人もやせていつています。農地や山も荒廃してきています。

今から10年後、町はどうなっているだろうか。何をしなければならぬのか。それこそ未来を見据え、知恵を出し合うのは「今です。」

町づくりの主人公は住民の皆さんです。町長はじめ町の執行部、町議会とも力を合わせ、汗を流していこうではありませんか。

(原 孝文)